

すべきとの結論に達した。

25. ^{99m}Tc -コロイドスキャンと ^{99m}Tc -HIDA スキャンで肝イメージ上、所見の相違を呈した肝内胆管癌の一例

鹿熊 一人 (能登総合病院・放)
伊東 哲郎 (同・内)
宮崎 吉春 井上 寿 塩崎 潤 (同・RI)
油野 民雄 (金大・核)
松井 修 (同・中放)

症例は63歳女性。既往歴として高血圧性心疾患、慢性肝炎を指摘されており、全身倦怠感を主訴として来院。検査成績では、肝胆道系酵素の軽度上昇と、血沈の軽度亢進を認める以外に特記すべきことは認めず。外来超音波検査にて、右肝内胆管枝の軽度拡張像と、肝門部の小腫瘍陰影を認め、肝内胆管癌を疑い精査した。 ^{99m}Tc -HIDA スキャンでは、肝への集積ならびに、右肝内胆管枝の描画を認めず、右肝内胆管閉塞の所見を呈した。 ^{99m}Tc -スズコロイドスキャンでは、び慢性肝疾患の像を呈したが、特に Defect の所見は認めなかった。

本邦における区域性胆管閉塞の例は、主に肝内結石が多く、肝内悪性腫瘍による報告はきわめて稀であること、また、 ^{99m}Tc -スズコロイドスキャンと、 ^{99m}Tc -HIDA スキャンで所見の相違を呈した、悪性腫瘍による区域性胆管閉塞の例が、まだ Gamnt にも記載されていないことより報告した。

26. ^{201}Tl 経直腸的門脈循環検査のシミュレーション：コンパートメント解析の試み

中嶋 憲一 利波 紀久 久田 欣一 (金大・核)

^{201}Tl の直腸内注入法により算出される心/肝摂取率比 (H/L) は、門脈・大循環系のシャントを反映する指標として臨床に応用されている。しかし、 ^{201}Tl の体内での動態には不明な点もあり、H/L とシャント率との関係も明解にされていない。そこで、本検査における ^{201}Tl の動態を3コンパートメントまたは4コンパートメントと仮定して、シミュレーションを行った。3コンパートメントは、直腸、肝、心の3臓器に設定し、おのおのの

K 値 (あるいは半減期) を変化させたときの H/L に与える影響を検討した。さらに、その他の臓器を代表する第4のコンパートメントを設定した場合についても検討した。この結果、1) H/L は ^{201}Tl を直腸内に注入後、3時間以内では、わずかに増加するものの、ほぼ一定とみなせること、2) 直腸からの吸収の速さは、H/L にほとんど影響しないこと、3) シャント率が増加すると H/L は指数関数的に増加することが推定された。しかし、コンパートメントの数、各臓器の K 値 (または半減期) の設定、シャント経路など、問題点も多く、今後実験結果などとも併せて、さらに検討予定である。

27. 脾疾患における脾シンチグラフィの評価

吉田 宏 松尾 定雄 矢橋 俊丈
岩田富貴子 金森 勇雄 (大垣市民病院・放)
中野 哲 綿引 元 武田 功
小沢 洋 杉山 恵一 渡辺 幸夫 (同・消)
佐々木常雄 石口 恒男 (名大・放)

今回、われわれは、151例の脾シンチグラムを疾患別に検討し、脾シンチグラフィの評価を行った。

(1) 脾シンチ上、明瞭な描出を示したものは、良性疾患に41例中27例 (65.9%) と多く、脾疾患、特に脾癌では18例中1例 (5.6%) と少なかった。

(2) 脾シンチ上、全体的に淡い描出を示したものは、良性疾患 (14.6%) に比し、脾炎 (28.0%)、慢性脾炎疑診群 (20.0%)、糖尿病 (27.8%) に若干多い傾向を示した。脾癌では18例中1例 (5.6%) と少なかった。

(3) 脾シンチ上、全体欠損を示したものは少数ではあるが脾癌 (16.7%)、脾炎 (16.0%)、悪性疾患 (10.3%) にみられた。

(4) 脾シンチ上、部分的な描出不良を示したものは各疾患とも良性疾患 (14.6%) と同程度の頻度であった。

(5) 脾シンチ上、部分欠損を示したものは、脾疾患、特に脾癌 (61.1%) に多かった。

(6) 脾シンチ上、全体的あるいは部分的に欠損像を呈した症例は、ERCP, CT, US により、同部位に形態異常を認めるものが多かった。

(7) 脾癌のシンチグラム像は、頭部癌では全体欠損を、体部癌では、尾部欠損を、尾部癌では尾部欠損を示す傾向にあった。